The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アーレントにおける判断と共通世界
Author(s)	楊, 泓
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2025, 58, p. 17-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100947
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アーレントにおける判断と共通世界

楊　泓

キーワード：アーレント／判断／世界／観想的生／相互主観性

はじめに

1970 年代以降、「判断」はアーレント研究における最も重要な争点の一つであり続けている。「判断」に関しては数々の先行研究が行われてきたが、それらにはある根強い解釈の方向性が見いだされうる。それはすなわち、アーレント後期の「判断」に関する論述を政治的な文脈から離れて捉える、というものである。しかし本稿は以上に見られるような「判断」を脱政治化して解釈する方向とは反対の立場をとる。むしろ本稿の解釈によれば、「判断」は政治的な契機を含むことによって一貫した解釈が与えられうる。すなわち、たとえ後期のアーレントであったとしても、「判断」はその性質からして政治的なものなのであって、それは現象世界および行為と密接に関連している。

行論としては以下のように進む。まず第一節では、アーレントの「判断」に関する近年の研究の動向と、そこで擁護される解釈について確認する。そうした解釈によれば、アーレントは後期の著作において、政治と直接関係する「活動的生［vita activa］」と、政治とは（完全にとは言えないが）関係のない「観想的生［vita contemplativa］」という区分のうち、「観想的生」の枠組み内で「判断」を考えている。そうした見解には一見したところ一定の妥当性がある。というのは、アーレントにとって「判断」は「思考」と緊密な関係があり、「判断」がもたらされるためにはまず「思考」が可能でなけ

ればならないが、そうして「思考」が「判断」の前提である限りにおいて、「判断」と「観想的生」との繋がりは否定できないからである（1）。第二節において論じるのは、「思考」とは峻別される「判断」である。それ自体が独特な精神の活動である「判断」は、現象世界における複数の人々を、つまり具体的な現象の現れの中での他者を必要とする以上、相互主観的に成立するのである。他者を必要とする相互主観的な判断は、共通世界あるいは公的な政治領域の構成にとって不可欠の基準である。その意味で、「判断」は政治に繋がっているものである（2）。第三節では、ある可能な反対意見を取り上げる。その意見によれば、「観想的生」と「活動的生」との区別に基づき、判断者と行為者はそれぞれ別種の人間のあり方である。そして前者は過去への反省に没頭しており、現実の行為と政治領域と関係することはない。本稿の解釈によれば、確かにアーレントはいくつかの箇所において判断者が直接的に判断者と行為者は同じ人の中で相互に転換可能でなければならない（3）。

1、特殊な思考としての判断

アーレント自身が提示する活動的生と観想的生という対概念を鑑みて、1970 年代から、いわゆるアーレントの後期の著作は活動的生と対立している観想的生について詳しく論じている。「以下のことは一般的に前提とされている。すなわち、『人間の条件』と『革命について』など関連している著作は活動的生を取り扱う一方、［…］『精神の生活』を含む後期アーレントの著作は観想的生へと注意が劇的に転換したことを示している（例えば、Benhabib 1988, pp. 29-30; Jonas 1977, p. 77）」[1]。「劇的に転換したこと」が意味するのは、後期アーレントが政治の場から目をそらして、活動的生と対立する観想的生に関心を寄せた、ということである。そうした解釈を踏まえると、後期アーレントの論考における判断も、政治と無縁であるような観想的生に属すると想定される。そうした解釈は今日まで継承されてきた。

Maurizio Passerin d'Entrèves（2000）は判断に関するアーレントの理論は二つの段階に分けられると考える。前期の段階では政治領域における行為者の判断が注目され、後期の段階では行為に参加しない観察者、すなわち詩人と歴史学者の判断が中心となる。前者が活動的生と繋げられると同時に、彼は「判断と観想的生」というサブタイトルの下で後者を議論する。[2] 宮﨑裕助（2020）はそうしたアーレント解釈の影響を受け入れ、二つの判断力の区分に基づいて議論を展開する。「『精神の生活』の時期のアーレントは、たしかに二つの判断力のあいだに「衝突」をみてとり、判断力が、『人間の条件』の時期のように活動的生活に関与するというより、本来は、精神活動として観想的生活に関与するものだと主張しているように思われる」。[3] アーレントにとって、政治は人々の間の相互関係を取り扱う営みである。複数の人が政治領域において現れ、相互行為を介して他者との関係を構築する。以上の研究者によれば、観想的生は活動的生と対立させられることを通じて、前者がもっぱら政治領域から脱出するような純粋に思弁的な生活方式であるとされる。もしアーレントの後期の理論において、判断がそうした観想的生に帰されるのであれば、彼女の関心は確かに驚くほど激変しただろう。

しかし、『カント政治哲学講義』（1982）によると、以上の解釈を明白に拒絶しうる。プラトンの政治哲学のような前提――すなわち行為に参加せず何をすべきかを知る者と、その者の指令に従って実行する者が、完全に分離して相互に転換不可能な二種類の身分であること――を想定する限りにおいて、「政治的な（活動的な）生活方式と哲学的な（観想的な）生活方式」は相互に排他的であると解釈されうる（LKPP 59-60）。プラトンにとって、観想的な生活方式は身体が精神に課す縛りから逸脱することを要求する。観想的に生活する哲学者は変化し続ける地上の出来事に注目せず、現象世界から脱出して、永遠に静止するイデアの世界に真理を求める。そのように理解される観想的生は確かに、人々の相互作用の中にいなくなるから、非政治的である。一方で、アーレントは活動的生ないし政治生活に関するプラトンの態度を以下のように浮き彫りにする。つまり、プラトンが政治生活について語

ることは、それが「哲学者の生活のための最もよい情況を構成する」からである（LKPP 21）。まさに身体の欲求が精神の追求を妨害しないことを確保するために、政治生活への規制が考えられる。プラトンに従えば、観想的生に比べて、活動的生は重要視に値する対象ではない。だが、観想的生と活動的生の関係について、アーレントはプラトンの立場をとらず、カントの立場に加担する。カントにとって、判断を下す観察者の視点と行為者の視点は決して硬直するわけではない。同じ人の中で二つの視点が相互に転換可能であることが何を意味するのか、そしてそれがいかに可能なのか、という問題を明らかにするのは本稿の第三節に譲るとして、さしあたり、観想的生についてのプラトン的な見解をより詳しく検討しよう。

本節の冒頭で確認した、観想的生を活動的生と対立させる解釈は、政治領域を敵視するプラトンと政治哲学的な前提を共有する。そして精神の活動である判断も観想的生に属し、政治と対立してしまう。その解釈は完全に間違っているとは言い切れない。というのは、判断がプラトン的な観想的生の要素を間接的に含んでいるからである。両者は「思考」という共通項を通じて繋がっている。この繋がりを説明するために、次にプラトンが構想する観想的生と思考との関係、そして思考と判断の関係をそれぞれ考察する。

プラトン的な観想的生に対して、思考が親和性を有している。「思考と道徳の問題」（1971）において、アーレントはカントに従い、思考を知［knowing］と区分する。『純粋理性批判』（1781/1787）の一般的な読解として、カントは現象界と叡智界からなる二世界論をたてて、現象界における科学的認識の可能性を確保する。アーレントはそうした読解の力点を変えて、二世界論のもう一つの側面に焦点を置く。つまり、認識ないし知を思考から区分し、それらの妥当性を現象界に限定することによって、カントは同時に（現象界に限定されないという意味での）思考の「自由」を保証する（Cf. TMC 421-422）。従って、思考と知ないし認識の相違点は、第一に、以下の事実にある。思考の対象は現象世界の具体的な事柄に限定されておらず、むしろ可能な知の限界を超えたものを対象にしようとする性質が思考にはあ

る。思考のその性質は現象世界から逸脱することを主体に要求する。その要求を満たすために、思考をなす主体はあらゆる行為を停止せざるをえない。「なすことと生活することは、*inter homines esse*,『私の仲間と共にいる』の最も一般的な意味において、［…］ポジティブに思考を妨げる」（TMC 423）。人間同士の相互関係を切り捨ててはじめて、意識のなかのもう一人の自我が主体に対して現れる。「思考は、カントがプラトンに賛同したように、私と私自身との無声の対話であり［…］、そして思考が（ヘーゲルが言ったように）『孤独な営み』であるということは、あらゆる思考者が同意するだろう数少ないことの一つである」（KLPP 40）。思考が要求する現象世界からの逸脱およびあらゆる行為の停止を考慮に入れるならば、思考はプラトン的な観想的生と繋がっている。

思考と知の間には第二の相違点がある。まさにこの点において思考は判断と関連する。アーレントによれば、一方で知［knowing］は結果志向的であり、知識［knowledge］を導き出すという目的の手段である。他方で思考はいかなる結果にも執着せず、目的と手段のカテゴリーに縛られていない。思考は純粋に破壊的であり、捉えられたものの妥当性を根底から覆す。そして思考が現存している規範、権威および意見を対象として捉える場合、思考の破壊力はそれらの妥当性を揺さぶる。そうした破壊力をアーレントは思考の「解放する作用」と呼び、判断を行う必要条件であると考える（TMC 446）。ここで思考と判断の関係をより詳しく考察するために手掛かりとしたいのは、カントが『判断力批判』（1790）において提示する思考様式である。

> 普通の人間悟性の次の諸格率は、趣味批判の一部分としてここに属するのではないが、しかし趣味批判の諸原則を解明するために役立つことはできる。それは、こうである。一 自分で考えること［Selbstdenken］［…］。（V 294）

この思考様式から、思考の予備的作用が見出される。つまり、思考が主体を

予め現存している権威や先入見から解放し、自分自身の悟性だけによって反省することを求める。まさにこの意味において、アーレントは思考が判断と密接に関連していると考える。『カント政治哲学講義』の末尾に、アーレントはカントが与える判断の定義を引用する。「[…] 判断は『特殊なものを**思考する能力**』である」(LKPP 76)。思考はいわば判断の第一段階である。そして思考という共通項を通じて、判断はプラトン的な観想的生に間接的に結びついている。あらゆる権威ないし偏見から自由になるために、判断はまず思考という形態となり、現象世界から逸脱しなければならない。「意志する精神あるいは判断する精神は、**ただ一時的に、また後に還帰しようとするように**、この世界から自分自身を取り除くのである」(LM 92)。

2、判断と共通世界

第一節では、活動的生と対立する観想的生に判断を帰し、判断の政治性を否定する解釈が確認された。その解釈は判断の性質を部分的には正しく記述している。思考という形態を取る限り、判断は確かにプラトン的な観想的生と関連している。しかし他方、この第二節がこれから示すように、判断は独特な精神活動としてやはり思考とは異なっている。判断は一時的に現象世界から逸脱した後に、世界に再び還帰する。次に、いかにして判断は世界へと還帰するのか、それを明らかにするために判断と世界との関係を考察する。結論を先取りしていえば、判断は耐久性と共通性という二つの性質を介して、政治的空間としての現象世界に繋がっている。

まずは判断が耐久性を契機として世界に関わることから考察しよう。ここで手がかりになるのは「文化における危機」(1968) である。この論文において、アーレントは大衆社会と文化の衝突について論じることから始める。アーレントは大衆社会を以下のように診断する。すなわち、大衆社会における人々は生存に必須の労働以外に、余裕を持って他の活動に時間を費やすこともできるが、そうした人々はつねに生物の生命プロセスに縛られている。

空腹になれれば何らかの食物を消費しなくてはならないのと同様に、効率的に労働を完成した後に残された時間は、何らかのものを消耗して埋められなくてはならない。そこで大衆社会は文化を空虚な時間を費やすための消耗品として理解する。まさにそうした理解は文化における危機をもたらす。「文化は客体と関連し、世界の現象である［…］。ある客体が耐久する［endure］限り、文化である」（BPF 208）。文化は現象として世界に現れるために、形作られる客体を媒体としなければならない。そして文化の媒体になりうるのは、継続的に世界に存在する客体だけである。生命の循環に必要とされる消耗品は、本性上使い尽くされ、なくなるものである。もし文化が消耗品としてのみ必要とされるのであれば、そもそも文化は耐久する存在にはなりえない。

消耗品のかわりに、芸術作品が文化の媒体にふさわしいのである。というのは、芸術作品は生命のプロセスの消耗を免れるのみならず、目的と手段のカテゴリーからも逸脱でき、最も耐久性を持つ客体だからである。「純然たる耐久性の視点から見れば、芸術作品は明らかに他のあらゆるものより優位に立っている」（BPF 209）。芸術作品は人の欲求ないし目的に依存せず、むしろ「芸術作品のみが現れという唯一の意図のために作られる。**現れを判断する適切な基準は美である**」（BPF 210）。ここでアーレントは、芸術作品の生産者より、美という基準に照らして判断を下す観察者に優位を与える。アーレントは以下の事実に気づいた。すなわち、18 世紀および 19 世紀のヨーロッパに由来する「善き社会」の影響を受け入れ、芸術作品の生産者は貴族社会に取り込まれるための手段として文化と芸術作品を利用する（Cf. BPF 198-199）。目的と手段のカテゴリーにおいては、芸術作品の有用性が唯一の評価基準となる。実践的目的に執着する生産者は政治と無関係な「製作［fabrication］」しかできない。生産者の代わりに、行為を実行しない観察者だけが目的と手段のカテゴリーから脱出し、自身の趣味に基づいて美の基準から客体を判断する。そうした脱出がいかに可能なのかという問題は、本稿第一節で確認したように、思考の形態を取る判断によって答えられる。形作

られた客体は世界を構成するための必要条件にすぎない。観察者の判断を通じて初めて、美と見なされる客体が現象として現れうる。美の基準をクリアして現れうる芸術作品は、文化の媒体に相応しいのである。

ただし、現れだけではまた不十分である。観察者の判断を通じた美の現れは、死すべき人間を超えて生き残るほどに現れ続ける必要がある。換言すれば、ある客体が美であるという判断は、純粋な主観性を超えて諸世代に共通する妥当性を持つ必要がある。そうした妥当性を説明するために、アーレントは『判断力批判』における趣味判断の妥当性についてカントの分析に訴える。『判断力批判』第 40 節において、カントはラテン語で表現する「共通感覚［sensus communis］の理念」から趣味判断が必要とする三つの思考様式を導出する。本稿第一節で提示された引用を踏まえて、三つの思考様式の全体像を確認しよう。

> 普通の人間悟性の次の諸格率は、趣味批判の一部分としてここに属するのではないが、しかし趣味批判の諸原則を解明するために役立つことはできる。それは、こうである。一 自分で考えること。二 他のあらゆるひとの立場に立って考えること。三 つねに自分自身と一致して考えること。第一の格率は、偏見にとらわれない思考様式の格率であり、第二の格率は、拡張された思考様式の格率であり、第三の格率は、首尾一貫した思考様式の格率である。（V 294）

第一の思考様式については既に考察した。この第一の思考様式は、あらゆる先入見と権威から離脱すること、従って自分の理性を使って思考することを求める。先入見などの「主観的な個人的諸条件」（V 293）を免れてはじめて、第二の拡張された思考様式が導入されうる。拡張とは、判断の主体が自分自身の立場に没頭せず、他のあらゆる人の立場まで自分の思考を拡げなければならない、ということである。第二の思考様式によって、主体と同じ世界にいる複数の他者の存在が前提される。判断は存在者の複数性に依存して

いる。ただし、他者の判断は無反省的なものである限り、それをそのまま受容するのは「他者の偏見を私自身の地位に適合する偏見に入れ替える」にすぎない（LKPP 43）。そのかわりに、他者の実際の判断がまず主体の思考によって反省され、その判断に付随する偶然的なものが除去されなければならない。そうした浄化プロセスを通じて、他者の可能な立場が再現前化される。そして主体は、異なる立場を持っている他者であるような自分にも納得してもらえるように、自分の最初の考えを反省する。これこそ拡張された思考様式の内実である。最後に、主体自身の最初の思考結果と、他者の立場にたって反省することによって生じる新たな思考結果とを矛盾なく結びつけて最終的な思考結果を導くことが、首尾一貫した思考様式によって求められる。そうした反省プロセスを経由して初めて、判断の結果は他者にも伝達可能な共通感覚［common sense］になる。

以上のように、第二の拡張された思考様式から、アーレントは判断の妥当性を見出す。「私が所与の問題に考えをめぐらしているときに、人びとの立場を私の心に現前させればさせるほど、私の再現前化的思考の能力は強まり、私の最終的結論や意見の妥当性は増す」（BPF 241）。主体が自分の判断をより妥当なものとするために、より多くの他者を含めるように再現前化の範囲を拡張していかなければならない。そうして最終的には「他のあらゆるひと」が含まれることになるだろう。ただし、たとえあらゆるひとが含まれることになったとしても、アーレントは判断の妥当性にある制限を課す。「カントによれば、判断は『各々の判断する者一般にとって』妥当するが、この文が強調しているのは『判断する』である。判断は、判断しない人びとにとって、あるいはそこから判断の対象が生じるような公的領域の構成員ではない人びとにとって妥当するわけではない」（BPF 221）。判断の妥当性は他者への伝達可能性に由来するので、判断の妥当性の射程は判断する主体と同じように判断する他者からなる公的領域以外に伸びてはならない。感覚という主観的なものが他者の認証によって共通感覚になる際に、アーレントはその共通感覚から「非客観的感覚の中の非主観的要素」、すなわち「相互主

観性」を見出すのである（LKPP 67）。

さて、判断と世界の関係という本節の中心的なテーマに戻ろう。上述したように、形作られる芸術作品は物体であり、耐久性の必要条件を備えている。さらに、芸術作品は生命プロセスの消耗および目的と手段のカテゴリーから脱出し、観察者の判断が定める美の基準を満たすので、現れうる美の媒体である。また、そうした判断は相互主観的であるので、その基準をクリアする客体はある特定の世代にとって美であるのみならず、そうした客体は世代の交替に耐え、無数の主体によって美であると判断されうる。それゆえ、芸術作品は現れ続けることができ、死すべき者を超えて生き残る世界を構成する最も適切な要素である。「厳密に言えば、芸術作品は人々のためにではなく、むしろ死すべき者の寿命より長く存続する世界のために制作される」（BPF 209）。そして芸術作品に対しても、世界に対しても、その耐久性の十分条件は観察者の相互主観的な判断にほかならない。ゆえに判断は耐久性を持つ世界と不可分である。

また、判断は共通性を介して、共通世界としての世界と結びついている。相互主観的な判断そのものは公的領域に属し、公的領域のあらゆる構成員に対して有効であると想定される。アーレントにとって、そうした公的領域は共通世界そのものである。「第二に、『公的』という術語が表わすのは、世界がわれわれに共通なものである［…］限りの世界それ自体である」（HC 52）。現象世界における客体を反省する際に、我々が複数の他者の同意を得ることを想定し、従って他者と同じ現象世界にいることを意識する。趣味判断という能力は「世界が共通世界である限り、その本質をわれわれに開示する」（BPF 221）。この共通世界における諸観察者は自身の判断力を用いて、美の基準だけに基づいて客体が耐久性を持つ現象に、換言すれば現れ続ける現象に相応しいか否かを判定する。さらに言えば、耐久性と共通性は同じことの二つの側面である。耐久性を有することとは、客体が無数の観察者の判断をながく耐えること、従って諸観察者にとって美であることである。共通性を有することとは、客体が過去、現在そして将来の諸観察者によって美で

あると判定され、従って常に現象として世界に現れることである。そうした耐久的でありながら共通的でもある世界は、まさに複数の存在者を包括している政治的領域である。それゆえ、「固有に政治的空間である、公的な、われわれに共通の世界」の判定基準を用意する判断は、その本性上政治に関わるのである。[4)]

3、判断者と行為者を切り替える

判断の性質を詳しく考察したうえで、本節ではある可能な反論について考えてみたい。この反論を唱えうる代表者として、Ronald Beiner（1982）が挙げられる。Beiner によれば、アーレントにとって観察者と行為者は完全に分離し、相互に交替しえなかった二つの身分である。アーレントは 1971 年に出版された「思考と道徳の問題」を分岐点として、それ以前には活動的生をなす行為者の視点から、それ以後には観想的生をなす詩人と歴史学者の視点から判断を論じている。[5)]「彼女の前期の著作において［…］公的空間で調和して行為する行為者の複数性、という政治的行為に関する彼女の構想をさらに根拠づけるために、アーレントは判断力の理念を導入した。人間が政治的存在者として行為しうるのは、人間が他者の潜在的な立場に進入しうるからである」。[6)] 対して、アーレントの後期の著作において判断を精神の活動として取り扱う際に、アーレントは完全に政治の要素を捨てて、判断を観察者の観想的な営みと見なしている、と Beiner は論じている。

本稿第二節の議論は主に 1968 年に出版された「文化における危機」に照らして展開されるし、実際にその論文においてアーレントは「行為する人々［men of action］」という表現を用いる（Cf. BPF 217, 218）。そうした人々は、製作を行う人間に対置されている。もし「文化における危機」で登場する判断が行為者の判断だと解釈されれば、本稿の議論は Beiner への反論にならないだろう。また本稿第二節では、判断は依然として意識のうちに留まっている観想的な活動である。「確かに、批判的思考は**また孤立の中で行われ**

ているが、構想力の力によって批判的思考は他者を現前化し、従ってある**潜在的に**公的であるような空間に進入する」(LKPP 43)。そうした潜在的な公的空間と行為する政治的存在者との関係はいまだに不明瞭である。ゆえに、Beiner の立場から見れば、本稿第二節の議論だけによると、後期アーレントの議論が非政治的なものであることは十分に否定できない。

しかし、本稿第一節で提示したように、観想的生と活動的生の関係について、アーレントはプラトンではなくカントの見解に賛同する。そしてカント的な見解によれば、観想的生をなす観察者および活動的生をなす行為者という二つの身分が同じ人の中で切り替わることが可能でなければならない。

アーレントは『カント政治哲学講義』において、カントが提示する天才と普通の人の関係と、行為者と観察者の関係とを類比的にとらえる。カントによれば、「美しい対象を美しい対象として判定するためには、趣味が必要である。しかし芸術そのもののためには、すなわちこうした対象を産出するためには天才が必要である」(V 319)。天才は本質的に行為者である、とアーレントは考える。なぜなら、芸術は現象世界で現れるために天才の産出行為を必要としており、それは行為の結果だからである。芸術作品が産出されて初めて、趣味判断をする主体は判断しうるような対象を手に入れる。ここで以下の疑問が浮上する。すなわち、天才と普通の人、美を作る側と美を判断する側、どちらが優先しているのか。カントの解答を参照する限りでは、後者が前者に優先しており、美を判断する側は「不可欠の条件(conditio sine qua non)としてもっとも重要なものであり、技術を芸術として判定する際に注目されなければならない」(ebd.)。というのは、本稿の第二節で確認したように、ある対象の表象が美しいという判断には相互主観性は必ず付随しているからである。ある主体とともに判断するあらゆる他者がその主体と同様に対象の表象に快を感じる場合のみ、対象の表象は美しいと判断される。たとえ産出される芸術作品が天才一人だけの美感に適してもそれでは不十分である。そうした「天才」は本質的に「文化における危機」においてアーレントが批判する、反政治的な生産者となってしまい、ただ純粋な主観的基準

のみに注目する。それに対して、天才を天才たらしめるのは、主観性から脱却するために趣味という能力を行使することである。「趣味は、判断力一般と同様に、天才の訓練（ないし訓育）である［…］。天才が合目的的であり続けるためには、天才はどこに向かってどの程度まで自分を拡げるべきであるかについて、趣味は天才を指導する」（ebd.）。趣味は天才の産出行為を判断者全員が認めてくれるように規制し指導する。現象世界で出来事をなす行為者の場合も同じである。行為に巻き込まれない観察者の相互主観的判断は行為者の制限と規範になる。あらゆる観察者がある行為のなかの相互主観性を認めるかぎり、その行為が政治性を備える行為として公的領域で現れうる。それゆえアーレントにとっては、行為者が政治的行為を現実的に行うための前提は、観察者という身分に切り替わることにほかならない。「この批判者と観察者はあらゆる行為者［…］のなかにいる。この批判的な、判断する能力が欠如すれば、なす者あるいは作る者は感知されえないほど観察者と分離してしまうだろう」（LKPP 63）。

上述のカント的な見解を踏まえて、アーレントは行為者が観察者の判断に従って行為する必要性を見出した。ただし、行為の基準となる判断は、本稿第二節で確認したように、他者への伝達**可能性**が**想定されうる**判断である。行為者がそうした判断を根拠として実際に行為する際に、いつでもうまくいけるわけではない。というのは、相互主観的な判断そのものは「［…］蓋然的なものとならざるを得ない（そして蓋然的であるかぎりにおいて、その「普遍」も修正されうる）」からである。[7] 現実の世界においてトラブルが生じる場合、正しいと想定される判断は修正されざるを得ない。観察者の判断が現実世界において実際に衝突を起こすかどうかということは、その判断を行為によって顕現させて、当の行為を観察する他者の反応を再び反省することによってしか明らかにされえない。判断力についてのカントの以下の議論はまさにこの意味で理解される。「判断力は特殊な才能であって、まったく教えられず、単に練習される［geübt］にすぎないものである」（A 133=B 172）。主体は判断力という才能を身につけるために、判断力をあえて使用し

て、その普遍性を段々と高めるように自分の判断を調整し続ける。この練習は少なくとも下されるのが趣味判断であるかぎりにおいて、精神の活動として主体の内部に留まってはならない。趣味判断は各主体の間に、すなわちある公的領域において使用されなければならない。「人間の趣味は公的にしか養われえない」[8]。趣味判断の公的使用によって諸判断に含まれている主観的な要素が暴露され退けられる。自分の判断を公開し、現実世界に顕現させるために、観察者はつねに自分の中に行為者の身分を必要とする。そうした身分および判断の修正プロセスが欠如すれば、各人が想定した「普遍」がもたらすのは公的領域ではなく、むしろ対立しあう諸行為の間の戦争状態だろう。

以上の分析を踏まえると、判断者と行為者が同じ人の中で相互に転換可能でなければならない理由が明白になるだろう。確かに、判断を下す主体は先入見および実践的関心から逸脱するために、行為を同時に実行してはいけない。「しかし、それらのすべての活動［思考、意志そして判断］に共通しているものは、この特有の静けさ、つまりあらゆる行動や騒ぎの不在であり、関与と直接的な関心の偏りから引き下がることである」（LM 92）。ただし、行為者の立場と判断者の立場は**同時に**同じ人に存在しえないにもかかわらず、同じ人が備えなくてはならない二つの身分である。人はただ一つの身分として硬直するものではない。むしろ、異なる能力を自由に使うことによって人はつねに異なる身分の間で交替している。一方で判断者の基準をクリアして初めて、行為は現象として観察され、政治領域に帰属される。他方で公的領域において行為して自分の判断力を鍛え続けるかぎり、諸判断者は政治性を規定する基準であるような、より妥当である判断を手に入れる。判断と行為はともに公的な政治空間を構築する。ゆえに、本稿は以下の結論を導出する。判断の脱政治化を企む解釈はアーレントの判断理論への不完全な理解である。判断はアーレントにとっては本性上政治的なものである。

［注］

1） Steinberger (1990), p. 809.
2） Cf. Passerin d'Entrèves (2000), p. 246. アーレントが二つの判断理論を持つという解釈は、Ronald Beiner (1982) および Richard Bernstein (1986) にも見出される。
3） 宮﨑（2020）、145ページ。
4） 石田（2023）、27ページ。
5） Cf. Beiner (1982), p. 127.
6) Beiner (1982), p. 92.
7） 大河内（2019）、249ページ。
8） Saner (1973), p. 107.

［参考文献］

本稿の引用については、著者自身による強調は傍点で、引用者による強調は太字で表現する。［　］内は引用者による補足である。

カントからの引用については、『純粋理性批判』を除いて、アカデミー版カント全集の巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で記す。『純粋理性批判』からの引用は、第1版をA、第2版をBと表記し、ページ数をアラビア数字によって示す。

アーレントからの引用については以下の略号を用いる。

HC: Arendt, H. (1998=1958), *The Human Condition*, 2nd edition, Chicago: University of Chicago Press.
BPF: Arendt, H. (1968), *Between Past and Future*, New York: The Viking Press.
TMC: Arendt, H. (1971), Thinking and Moral Considerations, in: *Social Research*, Vol. 38, No. 3, pp. 417-446.
LM: Arendt, H. (1981), *The Life of the Mind*, New York; London: Harcourt Brace & Company.
LKPP: Arendt, H. (1982), *Lectures on Kant's Political Philosophy*, Ronald Beiner (ed.), Chicago: The University of Chicago Press.

Saner, H. (1973). *Kant's Political Thought: Its Origin and Development*, E. B. Ashton (trans.), Chicago: University of Chicago Press.
Jonas, H. (1977). Acting, Knowing, Thinking: Hannah Arendt's Philosophical Work, in: *Social Research*, Vol.44, pp. 25-43.

Beiner, R. (1982). Interpretive Essay: Hannah Arendt on Judging, in: *Lectures on Kant's Political Philosophy*, Hannah Arendt, Chicago: The University of Chicago Press.

Bernstein, R. J. (1986). *Philosophical Profiles: Essays in a Pragmatic Mode*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Benhabib, S. (1988). Judgment and the Moral Foundations of Politics in Arendt's Thought, in: *Political Theory*, Vol.16, pp. 29-51.

Steinberger, P. J. (1990). Hannah Arendt on Judgment, in: *American Journal of Political Science*, Vol. 34, No. 3, pp. 803-821.

Passerin d'Entrèves, M. (2000). Arendt's Theory of Judgment, in: *The Cambridge Companion to Hannah Arendt*, Dana Villa(ed.), Cambridge: Cambridge University Press, pp. 245-260.

Dianna T. (2002). Hannah Arendt on Judgement: Thinking for Politics, in: *International Journal of Philosophical Studies,* Vol.10, No.2, pp. 151–169.

David L. M. (2010). The Origin and Character of Hannah Arendt's Theory of Judgment, in: *Political Theory*, Vol.38, No.3, pp. 369-393.

大河内泰樹（2019）、「基礎付けなき判断」、『政治において正しいとはどういうことか——ポスト基礎付け主義と規範の行方』、勁草書房、247 − 278ページ。

宮﨑裕助（2020）、「判断」、『アーレント読本』、法政大学出版局、141 − 150ページ。

森一郎（2020）、「世界」、『アーレント読本』、法政大学出版局、151 − 158ページ。

石田三千雄（2023）、「アレントにおける政治的なものについて」、『ぷらくしす』、第24号、23 − 33ページ。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Arendt on Judgment and Common World

Hong Yang

Judgment has been among the most common themes in the study of Hannah Arendt since 1970s. In the English-speaking and Japanese-speaking world, there is a strong tendency to interpret Arendt's concept of judgment in the late period as an apolitical one. This study aims to correct the tendency and demonstrate that judgment in its essence is political.

In Section I, I focus on certain representative interpretations. They consider the concept of judgment to be within the frame of *vita contemplativa*, which is supposed to be completely apolitical. While *vita activa* is understood as a vigorous way of life, full of interactions in the public realm, *vita contemplativa* is regard as quiet and inactive, comprised of silent dialogs between *I* and *myself*. This reading is not wholly unjustified because for Arendt, judgment is based on thinking and thinking is an apolitical activity of the mind; however, in Section II, I examine judgment more closely as a distinct activity, namely, one that differs from thinking. The activity of judging invariably leads to intersubjective judgment performed by people living in the common world. Furthermore, Judgment is integral to the construction of the common world. Since the common world is also called the political realm, judgment is of political importance. In section III, I consider one possible objection that judgments and actions cannot harmonize with each other. According to Ronald Beiner (1982), people of judgment seem to have nothing to do with actors as characterized by Arendt in her late period, just as the *vita contemplativa* is distinguished from the *vita activa*. However, drawing on the Kantian explanation of the relationship between the two ways of life, I demonstrate that judgments and actions are so closely interconnected that they could not exist without each other in the political world. Judgment in its essence is political, insofar as judgment and action are interdependent in the political realm.